

書評…高野繁男『近代漢語の研究——日本語の造語法・訳語法——』

陳 力 衛

はじめに

近代日本語に関して最近の研究の進歩は著しい。とくに近代漢語について出自による個別語誌の遡源的研究が進む一方、洋学資料、中国資料による量的な調査に基づいて漢語の性格を層に分けて論ずる研究が増えている。前者の代表を荒川清秀の『近代日中学術用語の形成と伝播』（白帝社、一九九七）とするならば、後者は沈国威の『六合叢談』の学際的研究』（白帝社、一九九九）『遐邇貫珍の研究』（関西大学出版部、二〇〇四）の一連の研究をあげなければならない。また、朱京偉の『近代日中新語の創出と交流』（白帝社、二〇〇三）も資料と量的統計を結びつけたものとして人文科学と自然科学の専門用語を鳥瞰してくれるだけでなく、日中間における近代語彙の交流を物語っている。そんな中で、いわゆる日本資料に焦点を当てる個別の論文はあるものの、高野氏のご著書のような、日本近代漢語の跡付けをする重要資料の精査と分析は少なかった。その意味で本書はこの分野の研究に大きく貢献したことはいうまでもない。とくに造語法・訳語法の視点を掲げる点では、著者独自の特徴を発揮させられ

たものと見受けられる。ここで、本著がどういう特色を持っているかを中心に、以下四点に絞って、評者なりに整理してみようと思う。

一 近代語関係の主たる資料をカバーしている点

本著は日本の資料、とくに蘭学から英学まで、近代語研究に欠かせない代表的なものをカバーしている。全部で七章からなる本書の構成では、序章の「近代語彙研究の概略と課題」と第Ⅵ章「日中現代漢語の層別」、第Ⅶ章「近代漢語の造語法・訳語法」を除いて、資料を扱ったのは次の五章であり、本書の基本的骨組みをなしている。

- 第Ⅰ章『医語類聚』一八七二
- 第Ⅱ章『哲学字彙』一八八一
- 第Ⅲ章『百科全書』一八七四～八四
- 第Ⅳ章『明六雑誌』一八七三
- 第Ⅴ章『訳鍵』一八一〇

この書目を見れば、著者の、蘭学と英学とを比較しながら、両者の違いを意識しているところが分かる。一九世紀初頭の『訳鍵』から明治維新を遂げた後までの資料を取り上げていて、いずれも新語の誕生過程に寄与する重要

なものばかりである。とくに、資料面で『百科全書』についての開拓的な研究をし、その翻訳方法と新語の生成過程を、文科系「経済論」(一八七四)、「論理学」(一八七八)、「修辭及華文」(一八七九)、「言語学」(一八八四)と理科系「化学」(一八七五)、「天文学」(一八七六)、「物理学」(一八七七)とに分けて論じるところがいままでにない視点である。そして、後述するように語構成における両者の異同を対比的に指摘しているところが面白い。

資料から語彙を抽出して語の素性を見るのが従来のやり方であり、先行研究として佐藤亨氏の一連の研究はそういう意味で手本を示しているが、扱っている資料の性格は中国資料に傾いていた。それに対して、本書は日本の資料だけに絞って漢語の形成をながめている点が一つの特徴といえよう。

二 語誌から語彙への実践が行われている点

著者は語誌から語彙へと、「語彙研究は新たな段階に入っている」と言い、「中途半端な「語誌」研究で、やがて手づまりをむかえるだろう」という危機感を持っておられ、近代漢語研究の方向転換を促しつつ、師森岡健二の説を受けて語基という語彙論の語構成分析の一セクターをもって物差しとし、語彙論への転換の基盤を模索しているように見える。この語基は本書の重要な概念の一つであり、また分析手法の一つでもある。それについて、気づいた点を述べておく。

まず、漢語語基の分解の可否判断をどういう基準に求めるべきか、もし、個人への洋学への理解差によるとしたらその幅の伸縮が広すぎるような感じをする。たとえば、三三三頁で挙げた例、

氣絶、健忘、希釈、蛋黄

を見ると、すでに単語レベルのものになっている。また、資料の近代的な性格（日本近代語の象徴とされるところ）に頼りすぎて、「哲学字彙」で造成された語がすべて「和製漢語語基」であるというのは完全に中国由来の語の可能性を否定したものとなる。哲学字彙の個別語誌の研究ではむしろ中国由来の語を含めそれまでの蓄積が多くて、井上哲次郎の個人による新たな創出はごく一部分であるということが分かっている。その意味と関連しているかどうかかわからないが、本著では、「哲学」という語についてまず儒教用語の「希哲学」があり、それは中国で philosophy の訳語として転用し、それから「希」が略されたと見なされているが、従来の西周の創作とされる説と異なる点で面白いが、具体例の提示があればもっと説得力があるであろう。

また、理科系の語彙を蘭学の語基に、文科系の語彙を英学の語基に別々に分けて分析することが、はたしてそう割り切れるかどうか疑問に思うところがある。

三 語彙の消長の両面に注目する点

昔の言葉がなぜ今日まで残っていたかについての議論は斯界の主要な動向であり、現存する語の由来を遡る研究と表裏一体のものとなっている。その反面、「消え去っていく」語についてはあまり関心を示していなかったのも事実である。その消え方は、「函数→関数」のような書き換えによるものもあれば、「工銀→賃金」のような近世中国語から日本語（和製漢語）への置き換えによるものもある。後者だけを知っているのは明治期の用語の全体像をつ

かむことができないし、そういう用語の新陳代謝に目配りをしてはじめて、対照的に訳語の体系を形作ろうとすることができらるだろう。著者はまさにその点にこだわっていて、訳語生成過程の一側面として位置づけている。

四 用語の範囲に関する疑問点

本書では「和製漢語」という用語を多く使っているが、それはほとんど新漢語の概念に等しいと思われる。たとえば、著者は序章でヘボンの『和英語林集成』三版の序文に「新語の大部分は漢語であつた」というところに注目し、ここでのいう「新語」が「和製漢語」のことであると定義している。また、「蘭学と和製漢語」のところに、「和製漢語」は日本が西洋語を日本語に置き換える際に造語した訳語が主流であると主張している。

ただ、評者個人の理解では「新漢語」とかかわっている概念は少なくとも由来から見てもさらに「近世中国語」①、「訳語」②③④⑤、「和製漢語」⑥⑦に分けられる。そしてして中国由来と和製とに分けると、下記のように、前者が①②③で、後者は④⑤⑥⑦である。



問題になるのが「和製漢語」と「訳語」との重なりである。従来「訳語」は、西洋概念との照合において、新しい意味の注入という特徴があるが、その中身は、由来から次の三種類に分けられる。

- a 中国語からの直接借用。例②
- b 中国の古典語を用いて外来概念を訳すための転用。例③④
- c 外来概念にあてるため、日本人独自の創出。例⑤

その中で、cは中国語では形態上見つかからないという客観的な前提があるから、日本での創出と分かりやすく、aは逆に中国語からきたもので、従来の漢語の流入と同じと見なすことができるが、bの③は中国の洋学資料での

対訳が先に成立したものであるのに対して、bの④は日本での成立と見なされるものである。

「和製漢語」は古来形成されてきたもので、近代に限るべきではないと思うが、「訳語」という、明治に創出した漢語の象徴的なイメージと重なることで、両者を分かちがたいものになっている。つまり訳語のcは和製漢語としてももちろん見られるし、bの④もそう見られることも多い。③は見方によって異なる扱いになる。そういう見方に立っていれば、一〇五頁の「鉄道、保険、必要、交換、物質、空気、行為」といった語は②に属し、漢訳洋書や英華字典から直接取り入れたもので、純粋な「和製漢語」とは言いがたいだろう。

おわりに

本書は各資料を、語基をもって分析することで、語彙論的統一性をもたらそうとしているが、実際にその作業の中から大量な具体例を伴って提示しているところは、むしろ語誌研究へ大いに寄与するものとなろう。近代日本語の形成の大切な時期に出来た重要な資料からのこういった用例補充は、近代語研究の蓄積となるし、和製漢語辞典を作ろうと考えている評者にとってはまさしく用例の宝庫となりそうで、今後大いに利用させていただくことになると思う。

(明治書院、平成一六年二月一五日 定価七八〇〇円)